

大上宇一氏による 西播磨の甲虫相*

高橋 寿郎

日本の甲虫の研究が欧米人の来日により始まったことは良く知られている。そして大きく別けて Goschkevitch 夫妻の採集品をもとに研究をされた V. I. Motschulsky の研究（これらは北海道を中心に一部下田産のものもふくまれる）及び1864~1872年に長崎に在留し一旦帰国して再び1880年から1年8ヶ月滞在しその間主として長崎・兵庫・大阪及び関東から北日本に及んで採集調査をしそれを持ち帰り自身並びにヨーロッパの夫々専門家に研究を依頼多数の論文が発表された G. Lewis の業績が日本の甲虫の研究基礎となっていることは認められる。それ以外にも日本の甲虫を採集調査し甲虫に関する論文を発表された欧米人は何人かはいる。例えば Dr. Rein Johan, J. の採集なども兵庫での採集品が大変多くある。そう云ったことは日本での甲虫研究が始った時点から兵庫の甲虫の研究も始っているのであるが日本人による研究と云うことになると松村松年博士（明石生れ）がおられた北海道帝国大学が中心となり日本の北部の研究がその主力を占めていた（即ち北海道・千島・樺太などの研究が主体で本州でも関東地方・中部地方での調査はおこなわれつつあったようである）。

兵庫県でも兵庫・神戸はいち早く欧米人によって調べられたのであるが日本人による研究は神戸あたりではほとんどおこなわれていなかった。当時の神戸は港町であり漁港でもあった。文化的な見地からすればまだ未開の地と考えられる。兵庫県下では播磨地方などは近畿・山陽・瀬戸内・山陰の人々が行き交い、文化のつぼとなっていた。従って兵庫県下の甲虫相と云ったものを始めてとりあげたのは大上宇一氏による播磨産甲虫類という一連の研究報告であることは首肯できる。

当時日本の甲虫の研究が緒についたばかりの時期明治35年(1902)にいち早く大上宇一氏は西播磨の甲虫相をとりあげられ（蝶については明治33年に報文を発表しておられる）ているのであって之は大変な業績である。ただ西播磨の地と云うことになると可成りの範囲が広くその後全部をまとめた甲虫相の様なものは出ていないが部分的には宍粟郡下の音水・赤西をふくむ地域とか相生市の三湊山のものとかの報告は出ているが西播磨の中央部にあたる揖保郡を中心とした甲虫相はこの大上氏のもの以外ほとんど報告が見られない。その意味からすればこのあたりの甲虫相は現時点でも余り良くわかっていないと云えるのではないだろうか。

そこで今回はこの大上宇一氏の一連の報文をとりあげて播磨地方甲虫相の概略を眺めて見たいと考えた次第である。何分にも十分な文献が無い状況下で大上氏の研究は特に動物学雑誌に発表されたものは学名もついていないものが多く著者がつけた和名もあったりして現時点でよくわからないもの

*兵庫県甲虫相資料・212

が多くまして当時の標本を見られないので種の確定がかなり困難である。其処で昆虫世界に発表になられた方（こちらは参照文献もやや多く学名もほとんどつけられている）を今回はとりあげることにした。

大上宇一氏についての人となりとか業績のまとめなどは兵庫生物誌上にかなり詳しく出ているのでそれを参照して頂きたい（後出）。

今回此処にとりあげた大上宇一氏著の播磨産甲虫相については次の文献からで始めにそれ等を書いておきたい（蝶に関する一篇も加えてある）。

1900. 播磨蝶報. 動物学雑誌 12(139) : 187. (7科 45種) .

1901. 播磨産象虫科略報. 動物学雑誌 13(155) : 289-292 (マメゾウムシ科 2種. ゾウムシ科 30種) .

播磨産天牛科. 動物学雑誌 13(155) : 292-294 (28種)

播磨産金亀子科. 動物学雑誌 13(156) : 321-323 (28種)

播磨産金花虫科. 動物学雑誌 13(156) : 323-326 (35種)

播磨産步行虫科略報. 動物学雑誌 13(156) : 326-328 (28種)

播磨産天牛科追報. 動物学雑誌 13(156) : 329 (12種)

播磨産朽木虫科. 動物学雑誌 13(156) : 329-330 (ゴミムシダマシ科 13種)

1902. 播磨産甲虫報知 動物学雑誌 13(157) : 360-363 (オオキノコムシ科 10種. ガムシ科 12種. ミズスマシ科 2種. ゲンゴロウムシ科 5種) .

步行虫科追報 動物学雑誌 13(157) : 363-364 (3種)

播磨産甲虫類報知. 動物学雑誌 14(167) : 344-348 (いままでで215種になる。テントウムシ科 14種. ハムシ科 9種. カミキリムシ科 6種. キクイムシ科 4種. カミキリモドキ科 5種. ハナノミ科 2種. ツチハンミョウ科 2種. コガネムシ科 3種. これらを加えて264種報告されたことになる) .

1903. 播磨産甲虫類 動物学雑誌 15(171) : 20-25 (ケシキスイ科 5種. シデムシ科 3種. ハネカクシ科 8種. ガムシ科 2種. ゲンゴロウ科 5種. オサムシ科 16種. ハンミョウ科 3種. 以上計349種) .

1906. 播磨産甲虫類 昆虫世界 10(112) : 511-512 (ハンミョウ科 3種. オサムシ科 28種) .

1907. 播磨産甲虫類 (承前) 昆虫世界 11(115) : 110-112 (ゲンゴロウ科 13種. ミズスマシ科 2種. ガムシ科 9種. ハネカクシ科 7種. シデムシ科 4種. エンマムシ科 4種. ケシキスイ科 2種. オオキスイ科 2種. カッコウムシ科 2種. コクヌスト科 2種. カツオブシムシ科 2種. ヒョウホンムシ科 2種. クワガタムシ科 7種. 前回と計88種) .

播磨産甲虫類(承前). 昆虫世界 11(116):159-161(コガネムシ科 32種, タマムシ科 10種, コメツキムシ科 8種, ホタル科 7種, ゴミムシダマシ科 8種ここのまでの計153種).

播磨産甲虫類(承前)昆虫世界 11(117):199-202(クチキムシ科 3種, ハムシダマシ科 1種, カミキリムシ科 41種, ヒラタキクイムシ科 1種, シバソムシ科 1種, ツツキノコムシ科 1種, ケシキスイ科 1種, ゴミムシダマシ科 1種, ハナノミ科 1種, ツチハンショウ科 2種, カミキリモドキ科 4種, マメゾウムシ科 4種, ここのまでの計214種).

播磨産甲虫類(承前)昆虫世界 11(118):243-245.(ゴミムシダマシ科7種, ゾウムシ科24種, キクイムシ科 5種, ハムシ科 32種, テントウムシ科 17種, 以上299種).

以上が大上宇一氏が播磨地方の甲虫相として発表されたものであると考えられる(但し甲虫以外に次の様な報文も筆者の手元にある).

1902. 播磨の昆虫に就て, 昆虫世界 6(55):108-109. 1902. 播磨地方の寄生蜂類に就て, (1, 2), 昆虫世界 6(60):323-325. 6(61):373-375. 1903. 播磨産葉蜂科報告(1, 2), 動物学雑誌 15(174):114-122. 15(175):160-167.

始めに記した様に動物学雑誌に発表になられたものは参考書が無く一々学名を記入することが困難であり和名も松村博士の昆虫書に探りたる外深く他書を見ずとあり松村松年博士が1898年に出版した「日本昆虫学」を参考にした程度で和名など自分でつけたと述べている様にこの報文で種を正確に判断することは可成り困難である。その点昆虫世界に発表になった報文は松村氏の日本千虫図解及び日本昆虫学, 動物学雑誌, 昆虫世界等を参考にした上に1879年 G. Lewis が発表した“A Catalogue of Coleoptera from the Japan Archipelago(London)”を参考にしこのルイスのカタログ番号を今回の報文の各種につけさらに学名が記入されていることは相当に同定が出来ていることを示すものである。即ち恐らく同じ標本を基に発表されたと考えられる前回で349種記録されて今回の299種記録されていることは同定により可成り整理されたのではないかと考えられる。従って昆虫世界に発表になったもので検討するのがよりよいと思われるが残念なことに現在標本が残っていないのでこちらの記録でも同定に不安をおぼえるものが若干あったりしている。一々各種に就いての検討は大変なことなので今回は省略しているが現在の知見からすれば学名なども可成り変更になるものがあると考えられる(筆者はかつて大上氏のコガネムシだけを取り上げてそれを検討した報文を発表したことがある——“大上宇一氏記録の播磨産コガネムシ類について” MDK NEWS 25(2):17-21, 1973)。

大上宇一氏が播磨産甲虫類として発表になられたのは一応35科299種ということになり同じ西播磨

に属する相生市の三潁山で筆者が調べた甲虫類は(13回の調査結果)55科440種が記録出来ている(MDK NEWS Vol. 27, NO. 77, p. 2-6, 1977)。それからみると大上氏の記録は若干少ないかなアと云う気がしないでもない。植物相の豊富な音水・赤西地域になると甲虫の数はかなりふえる。一応現時点でこの実粟郡産で記録されている甲虫類は74科1,012種の多くを確認されている(かつて筆者は赤西・音水国有林の甲虫相の一部を発表したことがあるが——兵庫生物第7巻第1号, p. 39-41, 1975——事情があり完結していない。ここに示した数字は1987年度でまとめた新しいものである)。

この地域は特にカミキリムシ(193種), ハムシ(122種), ソウムシ(108種)と森林性のものが多くいるという特色が見られこの地域が植物相にも恵まれていることを示している。また可成り珍しい種を産する地でもある(実粟郡下の調査は筆者自身20数回実施しているしその他にも多くの記録を見ることが出来これらを総合しての数字である)。

揖保郡を中心とした大上氏の発表された報文はその意味からすればまだ充分ではない。また大きな欠点として単に種名の羅列に終り各種の産出状況とかデータが全く無いと云う点である。各種に就いての産策はともかくとして全体に眺めた場合余り特異なものが出てこない。このことは当時の同定出来る範囲での収録となっているためでもあろうと思うがまず普通に見られる種が多い様で甲虫相としての特色は余り見られない。若干記録されているものの内注意したいものについて説明して見る。

- クロカタビロオサムシ *Calosoma maximowiczi* (Morawitz) (オサムシ科) (学名は現在使用されているもので記してある。以下同じ)。

本種はこのあたりでは佐用郡の大嶽山にも産するし相生市の三潁山でも採集出来る。兵庫県全般から見れば川西市笹部あたりに多くいることは良く知られていたが現在の状況は変わっていると思われる。その他神戸市内でも得ているが可成り個体数の少ない種であり揖保郡あたりの産もそれ程多くなのかもしれない。

また大嶽山には分布の東限と考えられるチュウゴククロナガオサムシ *Carabus* (*Leptocarabus*) *kyushuensis nakatomii* Ishikawa を産するが揖保郡あたりにもいるかもしれない。

- ゲンゴロウ *Cybister japonicus* Sharp コガタノゲンゴロウ *C. tripunctatus orientalis* Gschwendtner (ゲンゴロウ科)

大形のゲンゴロウの仲間は最近急速にその姿を消しつつある様に思われる。自然環境の破壊もさることながら農薬の使用によって著しく影響を受けている様で兵庫県下でも全般にこの傾向にあるようだ。揖保郡下あたりの状況が良くわからないが同じ様な現象をあらわしているのかもしれない。

- ツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius* Lewis (クワガタムシ科)

揖保郡での記録はチビクワガタ *Figulus binodulus* Waterhouse と間違って同定されているのでは無いかと考えていたが最近本種は氷の山にはどうもいるらしいので或いはこのあたりにいないとも云えない様な気がする (きべりはむし Vol. 15, No. 2, P. 57-58, 1987).

尚動物学雑誌の報文の中にP. 299. オオクワガタ (Vol. 14, No. 169, P. 414, 1902) と云うのがある。学名が入っていないので其のオオクワガタかどうかよくわからない。このあたりにいるとすれば面白いのだが。

○ ツノコガネ *Liatongus phanaeoides* (Westwood) (コガネムシ科)

本種がこのあたりに分布しているとすれば大変喜ばしいがどうもこのあたりには分布していない種ではないかと考えられる。再検討の余地があるようである。

○ ヒゲコガネ *Polyhylla* (*Gynexophylla*) *laticollis* Lewis (コガネムシ科)

本種の県下の産地は可成り局地的の様である。東播磨に属する美囊川川原には多産するが西播磨での記録はほとんど無い。この種の産も再検討の要ありそうである。

○ コカブトムシ *Eophileurus chinensis* (Faldermann) (コガネムシ科)

本種は県下に割合広く産するようであるが個体数が多い種ではない。

○ トラハナムグリ *Trichius Japonicus* Janson (コガネムシ科)

本種の県下での産は可成り局地的の様でいわゆる稀種に近いと考えられる。揖保郡下では筆者自身も鷲籠山で1♂を採集した (27-V-1960)経験がある。

○ マクガタテントウ *Coccinula crotchi* (Lewis) (テントウムシ科)

県下での産地は可成り少ない。やはり注目されてもよいかと思う。

○ カメノコテントウ *Aiolacaria hexaspilota* (Hope) (テントウムシ科)

県下では広く分布している。多産地と云うのは余り知られていない。6月頃クルミハムシを食すると記録されている(成虫・幼虫ともにクルミハムシの幼虫を捕食する)。

○ ヒゲナガゴマフカミキリ *Palimua liturata* (Bates) (カミキリムシ科)

県下では山岳地域に割合いる種である。南の方で多くの個体を見ることは少ない様に思われる。

○ ハンノキカミキリ *Cagosima sanguinolenta* Thomson (カミキリムシ科)

ハンノキの害虫である。最近めっきり見ることの少なくなったカミキリムシである。(1988年5月26日竜野市神岡町で *lex.* 採集出来た)。

○ アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (Faldermann) (カミキリムシ科)

アサ(大麻)の害虫である。アサの栽培が禁止されてからはほとんど見ることの出来なくなったカミキリムシである。

播磨地方の甲虫相と云うものが部分的ではあるが今から90年近くも前に調べられているということは驚くべきであると共にその当時の文献の無い状況下でこれだけの調査をされた大上宇一氏の努力に敬服するのみである。そして現在でも尚この地域の甲虫相をしらべる人もなければまとまった報文も現れていないことが残念である。

最後になるが大上宇一氏から若干後になるが同じ西播磨のお隣に当たる佐用郡の昆虫相をまとめた井口宗平氏の貴重な報文がある。ただこちらの方は膜翅, 双翅, 甲虫の三目を除く報告になっているのが残念である。ただこの時期共に兵庫県西の端の地域でのファウナの報告があらわれていることにただただ敬意を表するのみである。一応井口宗平氏のファウナに関する報文で筆者の手許にある文献名を掲げておく。

1908. 兵庫県佐用郡産昆虫目録. 昆虫世界 12(127): 116-118. 12(128): 158-160. 12(129): 201-202. 12(130): 251-252. 12(131): 291-293. 12(132): 335-337. 12(133): 377-379.

1908. 有物目の四新種に就て. 昆虫世界 12(136) : 510-512. 1909.

兵庫県佐用郡産半翅類追加. 昆虫世界 13(141) : 205-207. 1950. 佐用郡産蝶類及び天蛾類の採集葉. 兵庫生物(4) : 49-51.

また井口宗平氏については室井 緯博士著 播磨の昆虫と井口宗平先生(兵庫県博物学会誌 No. 17 : 27-29, 1939) と云うのがある。

さらに大上宇一氏に関するものでは次の様な報文がある. 建部恵潤. 故大上宇一先生寄稿論文目録(1, 2). 兵庫生物 No. 3 : 30-32, 1949. 1(5) : 98-100, 1951. 三木 茂, 井口宗平, 吉野善介. 故大上宇一氏追憶記集. 兵庫生物 No. 4 : 54-56, 1950. 大上宇一資料展報告. 兵庫生物 9(4) : 247-248, 1988.

(MAR. 1988)

マツシタチャイロコガネの兵庫県下での分布

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 1 3)

高 橋 寿 郎

マツシタチャイロコガネ *Sericania matsusitai* Sawada は澤田玄正博士により松下伝吾氏が岐阜公園の朽木より採集された1対の標本により新種記載をされた (Jour. Agr. Sci. Tokyo Nodai, Vol. 2, No. 4, p. 569-571, 580, 582. pl. XL, f. 15, 16. pl. XL1, f. 7, 8, 15, 1955) 種である。

この記載で澤田博士は博士自身が *S. alternata* Sawada ヒラタチャイロコガネを記載された際の (Nippon-no-Kochu, Vol. 2, No. 1, P. 12, 19-20, pl. 2, f. 1. pl. 3, f. 5, 6. pl. 4, f. 3. 1938) 1♀, Minogo, near Onomichi. 1♀, Totoromi Osaka の2♀が共にこのマツシタチャイロコガネの♀であるとされている。

その後野村 鎮氏はこの *Sericania* 属の日本産のとりまとめ論文の中で (Tōhō Gakuho, No. 26, P. 178, 1976) 本種に言及新に産地に Wakayama : Kanaya, Arida, Chohoji を加えておられる。

図説は野村 鎮氏の“原色昆虫大図鑑Ⅱ(甲虫篇)” (pl. 63, f. 9, P. 125, 1963) と小林祐和